

新しい時代に対応した授業の在り方を考える

－活用型学習活動の実践を通して－

宇都宮大学教育学部附属中学校共同研究

1 研究主題設定の趣旨

1 社会的な背景から

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤社会」の時代であると言われている。このような社会においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である。しかも、知識・技能は、社会の変化に対応できるよう、常に更新していかなければならない。

このような状況の下、平成20年3月に新学習指導要領が告示された。今回の改訂にあたっては、現行指導要領の理念である「生きる力」をはぐくむことの継承が第一の目標であるとされ、「第1章総則、第1、教育課程一般の編成方針」の項において、以下のように述べられている。

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個を生かす教育の充実に努めなければならない。その際、生徒の発達の段階を考慮して、生徒の言語活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、生徒の学習習慣が確立するよう配慮しなければならない。

今回の改訂に至るまでには、これまで以下のような審議及び法改正がなされてきた。

平成18年2月に出された中央教育審議会「審議経過報告」は、学習指導要領改訂の基本的な考え方として、基礎的・基本的な知識・技能を身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむという現行学習指導要領のねらいは今後とも重要であり、その実現のための具体的手立てを講じることが必要と指摘した。また、基礎的・基本的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探究型の教育）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要であるとの考え方を示した。

平成18年12月には教育基本法の改正が行われ、21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から、これからの教育の新しい理念が定められ、新たに、知・徳・体の調和のとれた発達を基本としつつ、個人の自立、他者や社会との関係、自然や環境との関係、日本の伝統や文化を基盤として国際社会を生きる日本人、という観点から具体的な教育の目標が策定された。

さらに、平成19年6月の学校教育法の一部改正では、教育基本法改正を受けて新たに義務教育の目標が規定されるとともに、各学校段階の目的・目標規定が改正され、小・中・高等学校等においては、新規に「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない」と定められた。

これらを受けた、平成20年1月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」では、さらに、「生きる力」をはぐくむために必要な学力の要素として、基礎的・基本的な知識・技能の習得、知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、学習意欲の三つを挙げるとともに、学習指導要領の改訂にあたっては、次の6点が重要であるとした。（下線部は本校による）

- ① 「生きる力」という理念の共有
 - ② 基礎的・基本的な知識・技能の習得
 - ③ 思考力・判断力・表現力等の育成
 - ④ 確かな学力を確立するために必要な授業時数の確保
 - ⑤ 学習意欲の向上や学習習慣の確立
 - ⑥ 豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実
- がポイントであり、その中でも、特に、②を基盤とした③、⑤及び⑥が重要と考えた。

2 本校のこれまでの研究から

これまでも本校では、現行指導要領の理念である、「子どもの生きる力をはぐくむこと」を主眼とした研究を継続的に行ってきた。また、上記「⑥豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実」に関しても、様々な教育活動を通して、力を注いできた。

その中でも、新学習指導要領でも重要視されている、探究プロセスを体現する学習に関しては、平成10年度からの3ヶ年間にわたり、「生きる力を高める教育課程の編成－各教科の特性を生かして－」と題し、「生きる力」を高める教科指導の在り方を検討するとともに、新しい教育課程における各教科、選択教科、総合的な学習の時間の役割を明確にしていくことを目的とした研究を行った。この間に開発した総合的な学習の時間のカリキュラムは、現教育課程においても実践している。

本校の総合的な学習の時間のカリキュラムは、以下の通りである。

本校の「総合的な学習の時間」の概要

基礎コースのねらい： 問題解決学習を行うために、必要な資質や能力としての、学習スキルを身に付ける。

| コース | 単元(時数) | 時期 | ねらい | 主な学習活動 |
|-----|----------|----------|--|--|
| 基礎 | 基礎 A(35) | 1年 前期 | <ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータの操作に慣れ親しむ ・情報の収集・選択・加工・整理の技能を身に付ける ・情報活用能力の基礎を培う | 情報紙の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・ワープロソフトの利用 ・自己紹介カード等の作成 ・表計算ソフトの利用 ・インターネットの利用 |
| | 基礎 B(35) | 1年 後期 | <ul style="list-style-type: none"> ・情報活用能力を高めるために、文献・VTR視聴・講話・聞き取りなどによる情報の収集の技能を身に付ける ・収集した情報を広報紙や地域マップにまとめる過程において、情報の収集・選択・加工・整理の技能を身に付ける | 広報紙の作成 <ul style="list-style-type: none"> ・図書室や図書館の使い方 ・百科事典の使い方 ・VTR視聴とメモの取り方 ・マップづくり ・効果的なマップの利用法 ・聞き取り調査の方法 |
| | 基礎 C(35) | 2年 前期 | <ul style="list-style-type: none"> ・環境問題をテーマにし、グループによる課題解決活動を行わせることにより、課題解決の手順を体験する ・課題解決の過程において、「基礎A」や「基礎B」で身に付けた技能の習熟を図る ・発表の技能を高める | <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション用ソフトの使い方 ・プレゼンテーション用ソフトを用いて自己紹介 ・OHPの使い方 ・レジュメの作り方 ・環境に関わる事象についての課題設定 ・OHPやレジュメを用いた課題発表 ・追究結果の発表 |

課題研究コースのねらい： 生徒個人の興味・関心、問題場面から気付いた疑問を課題化し、様々な技能を駆使しながら意欲的に追究・解決・表現し、自分の研究をよりよい方向に導く資質や能力を育成する。課題解決活動の結果を、学級で発表したり、報告書にまとめながら、自分の生き方を考えたりすることができるようにする。

| コース | 単元(時数) | 時期 | 単元の重点 | 主な学習活動 |
|------|------------|----------|---|---|
| 課題研究 | 課題研究 A(35) | 2年 後期 | <ul style="list-style-type: none"> ・疑問の課題化 ・課題追究計画作成 | <ul style="list-style-type: none"> ・疑問の発見 ・疑問の発表 ・フィールドワーク ・課題解決の見通しをたてる ・課題解決の見通し発表 ・課題解決の見通し修正 ・研究計画作成 |
| | 課題研究 B(35) | 3年 前期 | <ul style="list-style-type: none"> ・課題の追究活動、計画の修正、改善 ・追究結果の整理、発表 | <ul style="list-style-type: none"> ・課題追究活動 ・課題追究計画の修正・改善 ・課題研究発表会 |
| | 課題研究 C(35) | 3年 後期 | <ul style="list-style-type: none"> ・課題研究報告書作成 ・追究結果の共有化 ・生き方を考える | <ul style="list-style-type: none"> ・報告書の作成 ・学級での発表会 ・体験活動 |

このように、3年間の学習を基礎コースと課題研究コースとに分け、それぞれ異なるねらいをもって指導することが特徴である。基礎コースのねらいは、「課題解決学習を行うために、必要な資質や能力としての、学習スキルを身に付ける」ことである。課題研究コ

ースのねらいは、「生徒個人の興味・関心，問題場面から気づいた疑問を課題化し，様々な技能を駆使しながら意欲的に追究・解決・表現し，自分の研究をよりよい方向に導く資質や能力を育成する。課題解決活動の結果を，学級で発表したり，報告書にまとめながら，自分の生き方を考えたりすることができるようにする」ことである。

本校では，このような学習活動が，新学習指導要領において提唱される，探究プロセスを体現した活動そのものであると考える。

また，学習意欲に関しても，平成14年度からの3ヶ年間にわたり，「『確かな学力』を身に付けさせる学習指導の在り方ー学ぶ楽しさを実感できる授業への改善を通してー」と題し，生徒の「学ぼうとする力」を高めるための方策についての研究を行ってきている。

以上，社会的背景及び本校のこれまでの取り組みへの振り返りから，基礎的・基本的な知識・技能の習得（いわゆる習得を目的とした教育）と自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探究を目的とした教育）の両方を総合的に育成するためには，両者の間にある「活用」に焦点を当て，研究を進めることが必要であると考えた。本校では，総合的な学習の時間において生徒自身に課題を設定させた上で，追究の成果を報告書にまとめ，発表させているが，各教科における授業の在り方や活動を再検討していくことで，これらの各活動にも好影響を与えるのではないかと考えている。

このようなことから，研究テーマを「**新しい時代に対応した授業の在り方を考えるー活用型学習活動の実践を通してー**」とし，研究を進めることとした。

本研究の目的は，新学習指導要領に基づく新教育課程の在り方を検討し，本校の実態に合う新教育課程を編成することである。特に，身に付けた知識・技能等を学習や生活において生かし，総合的に働かせるような生徒を育成するために，どのような学習活動を行えばよいのかを明らかにしていくことに主眼をおく。そのため，習得と探究の間に位置づけられた活用型学習活動に焦点を当て，その内容を検討する。

2 研究構想

1 研究計画

(1) 第1年次

- ア 共同研究の構想を立てる。
- イ 活用型学習活動の基本的な考え方を検討する。

(2) 第2年次

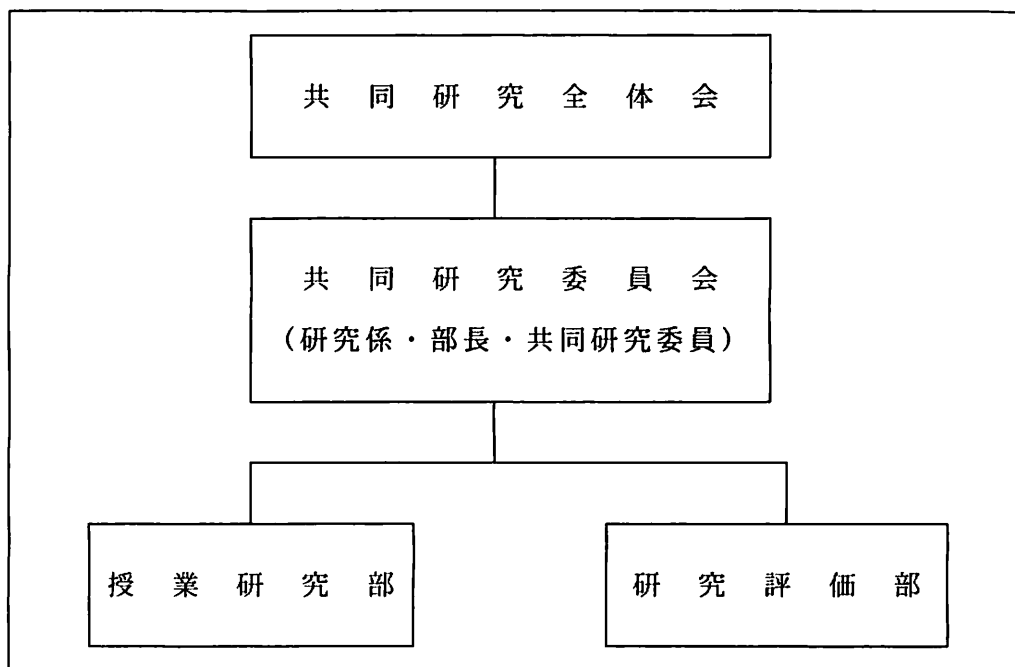
- ア 各教科の授業研究会を行い，授業評価をする。
- イ 活用型学習活動の基本的な考え方の修正を行う。

(3) 第3年次

- ア 各教科が開発した活用型学習活動例の分類及び一般化を行い、事例集を作成する。
- イ 本校の考える、活用型学習活動の在り方について提言する。
- ウ 研究全体の評価を行うとともに、新学習指導要領に即した教育課程を編成する。

2 研究組織

以上のような研究計画の下、共同研究を次のように組織した。



(1) 授業研究部の活動内容

- ア 教科と連携し、習得及び探究との関連を明確にした、活用型学習活動を取り入れた授業の開発を行う。
- イ 授業研究会の開催を主管し、授業評価を行う。

(2) 研究評価部の活動内容

- ア 研究の成果に関わる評価方法を検討する。
- イ 研究全体の評価を行う。

社会的背景

- ・知識基盤社会の到来
- ・基礎的・基本的な知識・技能の習得とそれらを活用して課題を見出し、解決するための思考力・判断力・表現力等の必要性
- ・教育に関わる法改正・新学習指導要領

基礎的・基本的な知識・技能の習得
自ら学び自ら考える力の育成
の両方を総合的に育成



教科学習において、
習得と探究の間にある「活用」
に重点化

本校のこれまでの研究

- 生徒の「生きる力」を高める
- ・探究プロセスを指向した総合的学習の時間
- ・学習意欲

研究主題

新しい時代に対応した授業の在り方を考える

－ 活用型学習活動の実践を通して －

目指す生徒像

身に付けた知識・技能等を学習や生活に即して生かし、総合的に備わせる生徒

習得 ← → 活用

教科の基礎的・基本的な知識・技能
思考力・判断力・表現力等（活用する力）

学習過程



有機的な関連性

探究

自ら学び自ら考える力

共同研究

各教科の研究テーマ

| 外国語 (英語) | 技術・家庭 | 保健体育 | 美術 | 音楽 | 理科 | 数学 | 社会 | 国語 |
|---|--|--|--|--|--|--|---|---|
| 「発信力」を高める英語学習指導の在り方 － 4技能相互の活用を通して － | 生活に生きる実践力を育てる授業の在り方 － 学んだことを積極的に活用する生徒の育成を通して － | 「からだを通して学ぶ力」を育てる保健体育科指導の在り方 － 保健体育学習における「習得・活用」とは － | 未来へつながる美術科授業の在り方を考える － 感じとる・創造する喜びを味わう授業の実践を通して － | 音楽を愛好する心情を育てる音楽科の指導の在り方 － 音楽における活用型学習活動の再検討 － | 新しい時代に対応した理科授業の在り方 － 活用型学習活動の実践を通して － | 数学的な見方・考え方を導く指導の在り方 － 知識・技能を広く活用させる授業を通して － | 知識・技能を活用する学習活動及び指導計画の在り方 － 話し合い活動を核として － | 生きてはたらく言葉の力を育てる国語科学習指導の在り方 － PISA型読解力の育成を通して － |

新指導要領に基づく指導の在り方について、「習得・活用」の観点から検討する。

総合的な学習の時間

3 研究内容

本研究は共同研究と各教科の研究からなるが、ここでは共同研究について述べる。各教科の研究の詳しい内容に関しては、各論をご参照いただきたい。

1 研究の仮説

本研究において活用型学習活動を開発・実践していくにあたり、研究仮説を次のようにおいた。

教科の学習において活用型学習活動を実践していくことで、教科の知識・技能を効果的に身に付けさせることができ、さらには、思考力・判断力・表現力等の能力も伸ばさせることができるであろう。

2 「活用」に関する中央教育審議会における審議の経過

「中央教育審議会教育課程部会『審議経過報告』」（平成18年2月13日）においては、学力に関する考え方において、次のように述べられている。（関連部分抜粋、下線部は本校による）

○ 現行学習指導要領の学力観については、これをめぐって様々な議論が提起されているが、義務教育答申でも指摘しているとおり、基礎的・基本的な知識・技能の育成（いわゆる習得型の教育）と、自ら学び自ら考える力の育成（いわゆる探究型の教育）とは、対立的あるいは二者択一的にとらえるべきものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である。

○ そのためには、知識・技能の習得と考える力の育成との関係を明確にする必要がある。まず、基礎的・基本的な知識・技能を確実に定着させることを基本とする。

こうした理解・定着を基礎として、知識・技能を実際に活用する力の育成を重視する。

さらに、この活用する力を基礎として、実際に課題を探究する活動を行うことで、自ら学び自ら考える力を高めることが必要である。これらは、決して一つの方向に進むだけでなく、相互に関連しあって力を伸ばしていくものと考えられる。知識・技能の活用が定着を促進したり、探究的な活動が知識・技能の定着や活用を促進したりすることにも留意する必要がある。

○ こうして習得と探究との間に、知識・技能を活用するという過程を位置付け重視していくことで、知識・技能の習得と活用、活用型の思考や活動と探究型の思考や活動との関係を明確にし、子どもの発達などに応じて、これらを相乗的に育成することができるよう検討を進めている。

その後の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」（平成20年1月17日）の「5. 学習指導要領改訂の基本的な考え方、（4）思考力・判断力・表現力等の育成」の項では、その内容が、次のように具体化されている。

○ 今回の改訂においては、各学校で子どもたちの思考力・判断力・表現力等を確実に
はぐくむために、まず、各教科の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得
とともに、観察・実験やレポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能
を活用する学習活動を充実させることを重視する必要がある。各教科におけるこのよ
うな取組みがあつてこそ総合的な学習の時間における教科等を横断した課題解決的な
学習や探究的な活動も充実するし、各教科の知識・技能の確実な定着にも結び付く。

このように、各教科での習得や活用と総合的な学習の時間を中心とした探究は、決し
て一つの方向で進むだけではなく、例えば、知識・技能の活用や探究がその習得を促
進するなど、相互に関連し合つて力を伸ばしていくものである。

○ 現在の各教科の内容、PISA調査の読解力や数学的リテラシー、科学的リテラ
シーの評価の枠組みなどを参考にしつつ、言語に関する専門家などの知見も得て検討
した結果、知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、例
えば、以下のような学習活動が重要であると考えた。

このような活動を各教科において行うことが、思考力・判断力・表現力等の育成に
とって不可欠である。

① 体験から感じ取ったことを表現する

(例)・日常生活や体験的な学習活動の中で感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを用いて表現する

② 事実を正確に理解し伝達する

(例)・身近な動植物の観察や地域の公共施設等の見学の結果を記述・報告する

③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする

(例)・需要、供給などの概念で価格の変動をとらえて生産活動や消費活動に生かす

・衣食住や健康・安全に関する知識を活用して自分の生活を管理する

④ 情報を分析・評価し、論述する

(例)・学習や生活上の課題について、事柄を比較する、分類する、関連付けるなど考えるための技法を
活用し、課題を整理する

・文章や資料を読んだ上で、自分の知識や経験に照らし合わせて、自分なりの考えをまとめて、A
4・1枚(1000字程度)といった所与の条件の中で表現する

・自然事象や社会的事象に関する様々な情報や意見をグラフや図表などから読み取ったり、これ
らを用いて分かりやすく表現したりする

⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する

(例)・理科の調査研究において、仮説を立てて、観察・実験を行い、その結果を整理し、考察し、まと
め、表現したり改善したりする

・芸術表現やものづくり等において、構想を練り、創作活動を行い、その結果を評価し、工夫・改善
する

⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

(例)・予想や仮説の検証方法を考察する場面で、予想や仮説と検証方法を討論しながら考えを深め合う

・将来の予測に関する問題などにおいて、問答やディベートの形式を用いて議論を深め、より高
次の解決策に至る経験をさせる

これら6項目の分類は、「教育課程部会『審議経過報告』」（平成18年2月13日）の中で示された「各教科等を横断してはぐくむべき能力」として示された「体験から感じ取ったことを表現する力（感性や想像力を生かす）」「情報を獲得し、思考し、表現する力（言語や情報を活用する）」「知識・技能を実生活で活用する力（知識や技能を活用する）」「構想を立て、実践し、評価・改善する力（課題探究の技法を活用する）」の整理の結果であり、現時点では最も具体的な形で示された、活用型の学習活動例と言える。

3 本校における活用型学習活動の基本的な考え方

以上のような考えを受け、本校では、活用型学習活動の在り方についてどのように考え、それをどう具体化していくのかを検討した。その結果、上記中央教育審議会答申に挙げられた①～⑥の活動例を出発点とし、今後3年間かけて、それらをさらに深化・補充していこうと考えた。その際の留意点として、有蘭格氏（岐阜女子大学教授）の、「学習で習得する基礎的・基本的な知識・技能を生きる力として“活用できる知識・技能”へと質的に高めていくことを目指す。」という考え方を参考とすることとした。

具体的には、以下の2点である。

ア 各教科で習得された基礎的・基本的な知識・技能を「活用」することで、その内容の理解をより深められるような活動であること。

イ 「活用」することで、「探究」につながるような、活用能力（何を使うか、いかに使うか等）を身に付けさせることを意図した活動であること。

これら二つの条件は、いつも両立するとは限らないが、少なくともアは必須であると考ええる。授業中に生徒に活動させることによって、知識・技能が自然に身に付くことを期待するだけでは、意図的な指導とは言えず、生徒が習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用しているとは考えられない。活用という学習は、明確な目的をもつ文脈の中で成立し、知識・技能のはたらきや必要性を実感できるような活動が必要とされる。そして、活用する内容は、学習を進める「方法としての知識」や対象教科に関わる考え方にまで及ぶ。つまり、活用の中では様々な知識・技能が想起され、それが繰り返し使われるということになり、その学習を通して基礎・基本の習得をいっそう図ることができると考えられる。

4 各教科の研究テーマと公開授業のポイント

各教科では、本校の研究主題を受けて、次のような研究テーマを設定し、研究を進めている。ここで、各教科の研究テーマと公開授業のポイントを挙げていく。

| | |
|---|--|
| 教 科 | 研究テーマ・公開授業のポイント |
| 国 語 | <p style="text-align: center;">生きてはたらく言葉の力を育てる国語科学習指導の在り方 － P I S A 型読解力の育成を通して－</p> |
| <p>今回公開する2授業については、以下の点に留意した。</p> <p>(1) P I S A 型「読解力」でいう「効果的に社会に参加する」ために、学んだことがよりよい生活を送ることに結びつくような指導をしていくこと。</p> <p>(2) 非連続型テキスト教材の教材開発を行い、P I S A 型読解力育成に役立てていくこと。</p> <p>(3) 「批評」を行うことを意識して発問や課題設定の仕方等に工夫をしたりすること。</p> <p>第1学年では、連続型テキスト（説明的文章）を用い、テキストの理解を助けるための図を複数の選択肢の中から一つだけ選択させることを通して、本文の「内容・形式」両面に目を向けさせ、文章の展開や要旨をとらえさせたい。</p> <p>第2学年では、非連続型テキストの「内容・形式」両面において、生徒がそれまでに身につけた具体的な知識を用いたり（活用）、複数のテキストを比較・対照（思考・判断）することで、特定の情報の妥当性や、テキスト上の表現の特徴を評価（批評）することを意図した。</p> | |
| 社 会 | <p style="text-align: center;">知識・技能を活用する学習活動及び指導計画の在り方 － 話し合い活動を核として－</p> |
| <p>地理的分野の授業では、小単元「日本の地域構成」で、地理を学習する上で大変重要な技能の一つであり、「地域の規模に応じた調査」等でも必要とされる「地域区分」を活用させる。「世界の地域構成」では、「トルコはアジア？ヨーロッパ？」という学習課題を設けて地域区分をする際の視点を習得させた。本時は、この知識を生かして、「山梨県は関東地方？中部地方？」という学習課題を設け、すでに学習した、地域構成をする際の視点を生かして学習課題を追究するとともに、地域区分に関する技能の深化をねらう。</p> <p>歴史的分野の授業では、小単元「近代の日本と世界」のうち、大日本帝国憲法を題材として学習する。前々時に、教科書の記述等をもとに、欽定憲法であり、人権に制限を加えた大日本帝国憲法の特徴をおおまかに理解させた。その上で、前時に「歴史新聞『号外！大日本帝国憲法発布』の社説を書こう」という学習課題を設定し、調べ学習を実施した。この際、それまでの大日本帝国憲法の理解を揺さぶるような資料を教師は配布した。生徒は、みんなで話し合いながら社説を作り上げる過程で、大日本帝国憲法を様々な視点から見直すこと（＝分かり直すこと）を迫られる。これにより大日本帝国憲法に関する知識の深化をねらう。</p> <p>いずれの授業も、話し合い活動を中心に授業を展開する。話し合い活動には、社会科がねらう学力のうち、思考力や表現力、社会的事象に対する理解が含まれている。また、話し合いまでのプロセスでは資料収集の技能も含めることもできるし、関心や意欲を高めることもできる。話し合いが自分の意見を発表するだけの場ではなく、話し合いを通して、活用した知識・技能や社会的な見方・考え方が変容したかどうかが見所である。</p> | |

数 学

数学的な見方・考え方を導く指導の在り方
 - 知識・技能を広く活用させる授業を通して -

数学科の目標の大きな柱は、「数学的思考力・判断力・表現力」の育成である。本研究では、生徒に様々な知識・技能を活用させながら問題の解決を考えさせる指導を繰り返すことで、多様な見方・考え方を導くことができる生徒を育てたいと考えている。その上で、生徒が身につけた知識・技能をどの場面へ活用していくのかという視点で、次の3つの活用する場面に分類し、それぞれに焦点を当てた授業を展開したいと考えている。

- ① 新たな数学の問題場面に、既習の知識・技能を活用する。
- ② 問題の解決に、知識・技能だけでなく数学的な見方・考え方を活用する。
- ③ 他教科の学習内容において、数学の知識・技能を活用する。

第1校時の3年生の公開授業は、上記の①に焦点を当てたもので、既習の知識・技能を活用して、新しい学習内容である2次方程式の解き方を考えさせていく。既習の知識・技能とは、主に因数分解のことを指しているのだが、解き方を考えさせていく上で、よりよい解き方や因数分解をする意義を十分に話し合わせたい。そして、解き方をきちんと理解させた上で、課題を発展させながら練習させることによって、定着を図るとともに、因数分解の知識・技能をより確かなものにさせたい。

第2校時の1年生の公開授業は、上記の②に焦点を当てたもので、数学的な見方・考え方を活用して、課題の解決を図ろうとするものである。本時は2時間扱いの1時間目にあたり、問題場面における課題を多様な方法で解決し、解決に用いたそれぞれの考えを明確にさせるとともに、文字式を利用して課題を解決するよさを確認する。次時は、本時の学習をもとに、条件を変えて発展的に考える活動を通して、活用を図らせることで、本時取り上げた数学的な見方・考え方のよさ、および、文字式を利用して課題を解決するよさを感得させたい。

理 科

新しい時代に対応した理科授業の在り方を考える
 - 活用型学習活動の実践を通して -

今年度の公開授業は、1学年「身のまわりの物質」、2学年「動物の世界」の単元で行う。1学年の公開授業では、水素、酸素、二酸化炭素、アンモニア、窒素などの気体の性質や捕集の仕方などの知識・技能を、新たな課題に取り組むことで、さらに活用できるようにしたいと考えている。炭酸アンモニウムの加熱により、二酸化炭素とアンモニアが同時に発生する反応を題材として取りあげ難易度を高め、学んだ知識や技能が十分に活用できるようにした。授業の過程で、結論を正しく導くことができるようにするために、発表や討論を行い、試行錯誤を繰り返しながら仮説を設定し直したりして、生徒自身が気体の種類を見いだしていけるようにした。2学年は、事前に動物の目の付き方や歯の形などが、それぞれの動物の生活にふさわしい形をしていることを学習した後に、様々な動物の特徴あるからだのつくりが、それぞれの生活にふさわしい、生きるための工夫がされているものであることを生徒自身に調べさせた。公開授業では、学んだ知識や理解を活用しながら、調べた内容を生徒が互いにクイズ形式で発表することにより、各自が興味をもち、思考を深め、お互いが学びあい、さらには今後の学習への意欲づけをはかりたいと考えている。

| | |
|--|--|
| 音 楽 | <p style="text-align: center;">音楽を愛好する心情を育てる音楽科指導の在り方 - 音楽における活用型学習活動の再検討 -</p> |
| <p>今年度の音楽科の公開授業は、第1学年で行う。本授業の目的は、表現を工夫する能力を育てていくことにある。そのため、題材を「旋律と和声のかかわりを感じ取ろう」とし、創作的活動を行うこととした。創作的活動は中学校に入ってから初めての活動なので、これからの創作的活動に意欲がもてるよう、導入にも工夫をしていきたいと考えている。学習過程は、次の通りである。まずカエルの歌の旋律に伴奏を変えて演奏していき、旋律はそのままでも演奏効果が変わるを感じ取らせ、タイトル（ソネット）をつけていく。またその中でも印象深かった演奏を分析させ、旋律はそのままでも伴奏を変えることによって演奏効果が変わるということに気付かせたい。これらの活動をふまえて、「こげよマイケル」という教材を使い、グループで旋律と和声のかかわりや伴奏のリズムを感じ取ることから、目標に迫っていきたい。</p> | |
| 美 術 | <p style="text-align: center;">未来につながる美術科学習授業の在り方を考える - 感じとる、創造する喜びを味わう授業の実践を通して -</p> |
| <p>第1学年の公開授業では、自己紹介の意味を込めての、スケッチブックの表紙のデザインを行う。例年「My favorite things (私のお気に入り)」というテーマで自分の好きなもの・大切にしているものをモチーフに、構成や配色を工夫して制作する題材である。構成や配色のよさや美しさを感じるための簡単な小作品制作（エクササイズ）を経てから制作するのだが、色や形について明確に意識してデザインするよりは「好きなもの」を自由に表現することに意識が向きやすく、意図をもって表現する喜びを感じる段階まで達しない生徒が見られたことが課題であった。その原因の一つとして、エクササイズの目標とこの題材の目標の間の微妙なずれが考えられる。</p> <p>そのずれとは、この題材は「好きなもの」を伝えるデザイン、いわゆる「視覚伝達デザイン」に近いものであるが、これまで「構成デザイン」的にとらえ、「色」や「成」の美しさや感じ方に目を向けた形のエクササイズを行ってきた点である。そこで今年度は、伝えたい内容をいかに効果的に表現するかという点に意識をおいたエクササイズに変更した。「エクササイズⅠ『小宇宙（マイクロコスモス）名刺のデザイン』や「エクササイズⅡ『My Colorを探そう』』といった、2～3時間という短い時間で完成まで持っていく小作品制作を通して、明確な目的と意図をもって意欲的に表現する喜びを感じ、自分の表現に自信をもちながら、創造する喜びを味わえる授業を目指している。</p> <p>なお、本年度の研究テーマの「未来につながる」には、生涯をとおして美術を愛好していこうとする生徒の育成を目指すとともに、美術科が義務教育課程の必修教科として重要な役割を果たし続けられるようにという願いが込められている。</p> | |

保健体育

「からだを通して学ぶ力」を育成する保健体育科指導の在り方
－保健体育学習における「習得～活用」とは－

基礎的・基本的な知識・技能を習得し、実際の運動場面のなかで生かしていくという過程において、自分のからだの状態に対応しながら、習得したことを修正したり、足りなかったことを補おうとする等のfeedback作用と、自分のからだの変化を察知し、習得した内容をより確実に強固なものとしたり、さらに次の段階へ高めようとする等のimprovement作用とが相互に行われることが、保健体育学習における「活用」の姿であると考えられる。さらに、知識や概念の理解にとどまらず、自ら進んで運動に取り組もうとする態度を形成したり、実際に体を動かして、試す・確かめる・実行する・継続する等、からだで「活用」することを通して学んでいく力を「からだを通して学ぶ力」と捉え、研究を推し進めている。

1年生「体づくり運動（体力を高める運動）」の授業では、今後、各単元・領域の授業の準備運動の段階で継続実施していく「サーキットトレーニング」のメニューを作成する。『〈体育に関する知識〉体力テストによる自分の体力の現状把握～〈保健〉体の発育・呼吸循環機能の発達についての学習～〈体育〉心拍数・主観的運動強度を指標とした運動処方と実践』という学習過程で学んだことを活用して、方法や強度等を工夫・修正し、より効果的なメニューの作成を目指すための支援を行う。

2年生「球技（ユニホック）」の授業では、ドリルゲームにおいてストローク等の基本的な技能の習得を目指し、それが個と集団の両場面で発揮できるかどうかを、グループ練習を行う中で確認していく。また、簡易ゲームを通じた戦術的な学習の場面では、それまでに習得した基本的な技能を生かすとともに、サッカーの授業で学習した練習方法や戦型等を想起させ、工夫して、発想を転換したり補充したりする「活用」の場面を多く引き出す学習活動を展開する。

技術・家庭

生活に生きる実践力を育てる授業のあり方
－学んだことを積極的に活用する生徒の育成を通して－

授業で学習したことを積極的に活用する生徒を育成するために、実践的・体験的な学習や問題解決的な学習において、学習意欲の高揚を図りながら、様々な視点や考え方を持たせたり、活用場面を意識させたりするなどの手立てを講じた授業を提案する。また、学習活動の適宜必要な場面で、実際の生活や社会とのつながりを意識させるようにして、生活における実践に結びつくようにしていく。

技術分野では、第2学年で、ネットワークを構築しファイルのやりとりをするなどの体験を通して、インターネットなどの情報通信ネットワークの利点や問題点について考えさせる授業を公開する。この学習では、これまで習得したフォルダやファイル、ソフトウェアの利用のしかたなどの知識や技術を活用し、ネットワーク上で共有化された情報を扱うことで、情報活用には責任が伴うことやモラルの観点を持つことが重要であることに気付かせたい。そして、ネットワークが社会で果たす役割を意識させるとともに、正しく活用しようとする意欲を持たせたい。

家庭分野では、第2学年で、自らの食生活を見直し、問題点を改善しようとする過程で「豊かな食生活」とは何かを考える授業を公開する。この学習ではこれまでに習得した知識や技術を活用するとともに、実生活で直面している様々な問題に目を向けながら考えることで、豊かな食生活を築いていくための新たな視点に気づかせ、実践に結びつくような意識化を図りたい。

外国語
(英語)

「発信力」を高める英語学習指導の在り方
－ 4 技能相互の活用を通して－

外国語科（英語）では、「英語を理解し、表現することができる実践的な運用能力を高める」という教科の目標を生かし、教材や他者との関わりの中で、知識・技能を活用させたいと考えた。

本研究の目的は、英語を単に受信することにとどまらず、それに対する自分の考えや気持ちを伝えることができる生徒の育成にある。そのような力を身に付けさせるためには、語彙や文法を確実に定着させることを基盤としつつ、「聞く」「話す」「読む」「書く」それぞれの技能の習得を単独に図るのではなく、4技能を相互に活用し、最終的な目的を、「発信」におくような活動が必要である。

2学年の授業においては、未来を表す be going to ～ / will を言語材料とし、夏休みの予定について伝え合うことに主眼をおいた、グループ活動を行う。グループ内の友人から、発表に対する意見やアドバイスをもらうことによって、発話内容の幅が広がることを目標とする。

3学年の授業においては、受動態を言語材料とし、自分の身の周りのものについての意見や考えを、友人たちと伝え合う活動を行う。他者との関わりにおいて、新たな意見や考えを聞くことにより、自分の認識の幅を広げていくことを目標とする。

どちらの学年においても、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能のつながりが見えるような活動が設定されているか、活動の前後において、発話内容に質的向上が見られているかがポイントである。

【参考・引用文献】

- ・文部省編：『中学校学習指導要領（平成12年10月）解説－総則編－』，東京書籍，1999
- ・文部科学省：『中学校学習指導要領』，2008
- ・中央教育審議会：『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』，2008
- ・中央教育審議会：『教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ』，2006
- ・中央教育審議会：『審議経過報告』，2005
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：『研究開発実施報告書』，1996
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：『第46回公開研究発表会発表要項』，2001
- ・宇都宮大学教育学部附属中学校：『第49回公開研究発表会発表要項』，2004
- ・横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校編：『習得・活用・探究の授業をつくる』，三省堂，2008
- ・安彦忠彦：「知識・技能の活用能力を育成するために」『中等教育資料No.855』，2007
- ・安彦忠彦：『教育課程編成論－学校は何を学ぶところか－』，放送大学教育振興会，2002
- ・高木展郎：「知識・技能を活用する力の育成－『習得→活用→探究』のプロセスを通して－」『中等教育資料No.855』，2007
- ・有蘭格：「教育課程の改善方向と学校の対応（下）」『教職研修2月号』，2008
- ・市川伸一，鏑木良夫編：『教えて考えさせる授業（小学校）』，図書文化，2007
- ・工藤文三編：『中学校教育課程のマネジメント解説』，明治図書，2007
- ・小島宏編：『新教育課程をめざした授業づくり』，教育開発研究所，2007
- ・浅沼茂編：『新しい「基礎・基本の習得」－基礎・基本の習得はどうあるべきか－』，教育開発研究所，2008